バートランド・ラッセルの記述の理論における「記述句」について

吉田謙二

I

バートランド・ラッセル Bertrand Russell (1872–1970) にしたがえば，なんらかの事柄を記すことは記述 description とよばれ，記述は不定的記述 indefinite description と確定的記述 definite description とに分けられる(1)。あるしかじかのもの a so–and–so という記述句は不定的であり，くだんのしかじかのもの the so–and–so という記述句は確定的である。つまり，不定的記述とはある概念の適用される事物のうちの不特定のものを表わす句であり，確定的記述とは特定のものを表わす句である。そして，記述そのものは，「すでに意味の定着したいくつかの言葉から成り立ち，かつ，その記述の意味として考えられるものはすべて，記述を構成している言葉の意味から導かれるものである。(2)」とラッセルは定義している。したがって，「ある男」は不定的記述であり，「その杖を持っている男」は確定的記述である。すると，不定的記述は，最終的には特定できないものを表わしているという意味で，一意的でないと考えられるのに反して，確定的記述は，それとして特定できる一意性があるように思われる。ところが，確定的記述の場合でも，「源氏物語の著者」という記述句と「プリン

キピア・マテマティカの著者」および「平家物語の著者」という記述句とを例として考えると，簡単に確定的記述が一意的であるとはいえないようである。というのは，「源氏物語の著者」が紫式部そのひとを指すのに対して，「プリンキピア・マテマティカの著者」は，ラッセルとホワイトヘッドであるし，「平家物語の著者」は，信濃前司行長をはじめ現今作者と伝えられている14,5名のひとびとや無数の琵琶法師だっただろうからである。したがって，確定的記述には，適格のもの proper と欠格のもの improper とがあると考えなければならない。すると，「記述の理論は，確定的記述を含む文 sentence の分析をするさいに有効な理論である(3)」はずであるにもかかわらず，これでは確定的記述の存在に関わる有効性も疑わしい。そこで，この小論では，まず，ラッセルの「記述の理論」の大筋を把握し(4)，ついで，記述される名辞の存在の問題を考察しよう。

II

ラッセルの記述の定義によって，記述を含む命題はまた記述であるから，命題がなんらかの情報を伝達するものであるかぎり，「記述」をめぐっては，「不定的記述」の方が「確定的記述」よりも基礎的なものであると考えてよかろう。

これまでは，「わたくしは太郎に会った」と「わたくしはある人に会った」とは同一形式の命題であると考えられていた。ところが，後者は，「『わたくしは x にあった，そして x は人である』という命題函数(5) はときとして真である(6)」と換言できるのに反して，前者は実在の人物である太郎を名指しており，形式は，「わたくしは x に会った」というにすぎない。すなわち「わたくしはある人に会った」という命題が何を意味しているかを問えば，実際に太郎に会ったと仮定した場合，そのときもなお，「わたく

しはある人に会ったけれども，それは太郎ではなかった」と言えるから，この命題には，太郎にかぎらず，「実在の人物が入っていない[7]」とも考えられる。それにもかかわらず，「この命題は，たとえ人間が全然いない場合——その場合には，この命題は真ではありえない——でも，ある意味をもつ[8]」と言える。というのは，「わたくしは狼男に会った」という命題が，架空の狼男を種にした作り話しの中だけにあらわれる怪物の定義を知っている人にとって，完全に意味の分かるものであるように，「わたくしはある人に会った」という命題も，「ある人」が太郎を意味しようがしまいが，人間についてのなんらかの定義を知っているすべての人に理解されるからである。つまり，この命題には，実際の人間が要素として含まれているのではなく，人という一般概念が要素になっているのである。したがって，明らかに，「わたくしは太郎に会った」と「わたくしはある人に会った」とは，まったく異なる命題である。「わたくしは狼男に会った」という命題も，わたくしは x に会ったという形式によって可能なのである。伝統的な主語・述語論理に従えば，文法的形式がもっとも重要な指標であるから，「わたくしは太郎に会った」と「わたくしはある人に会った」という二つの命題は同一形式であると考えられるのであるけれども，上に述べたところによって明らかなように，命題の論理的分析の指標に命題の意味を取れば，命題の要素になっているのは，概念であって，実在の狼男ではない。だから，われわれにとって実在的であるのは概念である。しかし，「円い四角」や「黄金の山」などを主語とした命題を作ることができるからといって，これらのものの論理的存在を主張できるのではない。「われわれにとって存在するのは，唯一の世界すなわち実在の世界であり[9]」，人びとがハムレットを読むときに体験する感情や思想，あるいは，シェイクスピアの想像が実在の世界の一部である。また，論理学はほかの諸学より，「一層，抽象的かつ一般的な性質を対象にしていても[10]」，ほかの諸学

と「おなじように実在の世界をありのままに取り扱うものであるから[11]」，概念の意味するものの存在を主張できるのは，「もっとも抽象的な研究にも保持されるべき実在感[12]」が，命題の要素である概念の基礎にあるときにかぎるのである。したがって，われわれは，「実在感にしたがえば，命題の分析に際しては，なんら非実在的なものは許容されるべきではない[13]」と主張しなければならない。すると，非実在的なものが存在しないのに，どのようにしてあるものが非実在的であるものとして認知できるのか，ということがつづいて起きる疑問である[14]。

いま，x が一つの記述であれば，それが確定的であるときも，あるいは不定的であるときも，「x は実在しない[15]」という命題函数は，x が何物をも記述していないときにかぎって真である。すなわち，x が一つの記述である場合にだけ，「x は実在しない。そして，x は非実在のあるものである[16]」という命題函数はときとして真なのである。なぜなら，x が「狼男」を意味するとすれば，x は，記述された対象として存在性を有するだけであって，「けっして何物をも記述しない不定の記述であり，非実在のあるものを記述する不定の記述ではない[17]」からである。したがって，われわれがあるものを非実在的なものとして認知できるのは，非実在の存在によるのではなく，「x は実在しない」といった命題函数が，「ときには真になるということから導かれる[18]」のである。

以上のところから，不定的記述を含む命題の意味は，一般的には，つぎのように定義されよう。

「『性質 ϕ を有するものは性質 ϕ を有する』という主張は，『$\phi(x)$ と $\phi(x)$ を結合した主張はかならずしも偽でない』ということを意味する[19]。」

すなわち，いま，ある性質 ϕ を有するあるしかじかのものに関する主張をしたとすると，この主張は，命題函数 $\phi(x)$ を真ならしめる x が有する性質を，あるしかじかのものも有することを言明するものである。ところ

が，「あるしかじかのものが性質ϕを有するという命題は，$\phi(x)$ という形式の命題函数ではない[20]。」なぜなら，もしそうである場合は，「あるしかじかのものは，適当な x にたいして x とおなじでなければならないだろう[21]」からである。前に述べたことからも明らかであるが，不定的記述の非実在は，不定的記述に一致するどんな x もないことによって可能であり，したがって，また，不定的記述が可能なのは，「x はあるしかじかのものであるという命題函数が，ときとして真であることもある場合[22]」である。換言すれば，「x が一つの名前で，x はあるしかじかのものであるという命題函数がすくなくとも一つは真である場合，それが存在する[23]」と言えるのである。したがって，このことからまた，確定的記述と不定的記述との違いが明らかになる。すなわち，「x は人である[24]」という命題函数は，同一形式の無数の命題が可能であるのに反して，確定的記述を含む上の命題と同一形式の命題は，「x はくだんのしかじかのものである」という命題函数になり，「すくなくとも一つの値に対しては真となる可能性がある[24]。」

確定的記述を含む命題は，したがって，つぎのように定義される。

すなわち，「(1) $\phi(x)$ はつねに『x は c である』と同値であり，(2) $\phi(x)$ が真であるような一つの要素 c がある[25]」という命題が，「$\phi(x)$ を満足する一定の要素は $\phi(x)$ を満足する[26]」という命題の意味である，と。

あるしかじかのものの命題は，一つの値にたいしてのみ真であるという条件で，あるしかじかのものについての対応した命題を含んでいるから，「源氏物語の著者は日本人である」というような命題は，つぎの三つの命題を含んでおり，この三つの命題が一緒になって，「源氏物語の著者は日本人である」という命題の意味を定義するのである。もちろん，その際，源氏物語の著者は「x が源氏物語を書いた」という命題函数が真である x の値として理解されねばならない。

(一)　「x が源氏物語を書いた」はつねに偽であるとはかぎらない。

(二)　「x と y とが源氏物語の著者ならば，x と y とはおなじ人間である」はつねに真である。

(三)　「x が源氏物語を書いた人であったのであれば，x は日本人であった」はつねに真である。

しかるに，上の(一)と(二)を，「『x が源氏物語を書いた』は x が c であるとき真で，x が c でなければ偽であるような一つの要素 c がある」というように要約できる。すると，一般的には「函数 $\phi(x)$ を満足する一定の要素がある[27]」という命題の定義を与えることが，「源氏物語の著者が存在し，その著者は日本人である」という命題の意味を定義することになる。というのは，「x が源氏物語を書いた」と「x は c である」とが，x のすべての値にたいして同値であるとき，c の函数は c の一つ以上の値にたいしては真ではないから，「源氏物語の著者が存在する」と言えるのであり，「源氏物語の著者」は，「『x が源氏物語を書いた』という函数を満足する一定の要素」であるからである[28]。一般的に言えば，「『くだんのしかじかのもの』は，つねに，ある命題函数，すなわち『あるしかじかのもの』を形成する性質を定義する命題函数に関連している[29]」から，「$\phi(x)$ と『x は c である』とはつねに同値であるような一つの要素 c がある[30]」という命題は，「函数 $\phi(x)$ を満足する一定の要素がある」ということの定義として採用できる。

この定義を用いると，「源氏物語の著者は日本人である」という命題は，c が日本人を意味するものとすれば，(一)『x は源氏物語を書いた』と『x は c である』とはつねに同値であり，かつ，(二) c は日本人であるような一つの要素があるという命題によって定義できることは明白である[31]。そして，この定義を一般化すれば，とりもなおさず，記述を含む命題の定義となる。

不定的記述を含む命題は，命題函数 $\phi(y)$ を真ならしめる x が有する性

質を，不定的記述にあたるものも有することを言明し，確定的記述を含む命題は，$\phi(x)$ を満足する値がつねにただ一つであり，その値は，「x は c である」という命題函数と同値になる一つの要素 c であるあることを述べるものである。したがって，円い四角や黄金でできた山の存在を問題にするべきではない。というのは，「黄金でできていてしかも山であるようなものが存在している」，あるいは，「円であってしかも四角形であるようなものは存在しない」という命題に置換してみると，これらが不定的であるか確定的であるかということに係りなく，そのいずれであっても，命題函数 $\phi(x)$ を真ならしめる x はありえないことが明白であるからである。文章の文法的構造がその論理的構造と同一であり，黄金でできた山といったものが存在を有するという考え方は，「x は実在しない」という命題が，x が何物をも記述していないときにかぎって真であるという命題によって，まったくあやまりなのである。したがって，記述の理論は，言葉を明確なものであるように考えることによって，われわれが無意識のうちに犯していた誤謬をあばき出し，言葉と不即不離の関係にあった実体概念の数を極小にまで減らすことを可能にしたと言ってよい。

以上に概括したところから，「記述」について一応の理解が得られたと思われるけれども，記述される名辞については分明ではない問題がある。というのは，不定的記述については，それを含む命題函数が真であることもあとる言われるのに対して，確定的記述については，それを含む命題函数がすくなくとも一つの値について真となる可能性があると言われ，後者は存在と不可分であるかのごとく語られていながら，その証明は行なわれていないからである。いったい，ϕ (x) はつねに「x は c である」と同値であり，$\phi(x)$ が真であるような一つの要素があるということが，$\phi(x)$ を満足する要素があることの定義として認められるからといって，要素 c の存在性がそのまま端的に自明であるわけはない。

III

ラッセルの述べているところによれば，「記述」とは，「$\phi\hat{x}$ が一つの独立変数によって満足され，それにかぎるようなある函数である場合の『$\phi\hat{x}$ を満足する名辞 x [32]』」である。さきに記したように，記述は定義によってまた記述であるから，「$\phi\hat{x}$ を満足する名辞 x は $\phi\hat{x}$ を満足する[33]」と言えるのは，「x が b であり，ϕb が真であるような名辞 b がある場合であり[34]」，「$\phi\hat{x}$ を満足する名辞 x」を“$(\imath x)(\phi x)$”で表わせば，$\phi(\imath x)(\phi x)$ は $(\exists b) : \phi x . \equiv_x . x = b : \phi b .$ を意味する[35]。ところが，このとき，$(\imath x)(\phi x)$ は，それが含まれている命題においてどれだけの部分に及ぶのかは分明でない。

たとえば，「丸い四角」について，「丸い四角は存在しない」と立言したとすれば，この命題は，まえに示したような分析によって真であることは明らかであるが，だからといって，「丸い四角」という対象の存在がその真によって否定されるわけではない。「丸い四角」という対象が存在するとすれば，「丸い四角は存在しない」という命題も有意味に存在しうる。しかし，「丸い四角」という記述が可能であるから丸い四角が存在するとはいえないのは，「狼男」という記述が狼男の存在を保証しないのに等しい。つまり，ある命題の主語の記述しているものの存在を否定しても，その命題が無意味にならなければ，当の主語は存在する対象を表わす名前ではない。だから，そのような場合，主語は消去できるように分析されねばならず，したがって，「丸い四角は存在しない」という命題は，「丸であってしかも四角であるような対象 x があるというのは偽である」という命題に置換される[36]。

「紫式部は源氏物語の著者である」という命題を例にとれば，源氏物語

の著者は，$(\imath x)(\phi x)$ の具体的な対象を意味し，それが紫式部と同じものを表わしているから，形式的には「紫式部は紫式部である」という同語反復が「紫式部は源氏物語の著者である」という命題の意味になる。しかし，もちろん，この命題の伝達する内容は同語反復ではない。つまり，「源氏物語の著者」を固有名と見倣せば，それはある対象を表わしていると考えられる。これをラッセルにしたがって記号化すれば，"$E!(\imath x)(\phi x)$"[37]と書けよう。一般的にいえば，これは「『くだんのしかじかのもの』が存在する」という表現である。すると，問われるのは，紫式部を a と記せば，$a=(\imath x)(\phi x)$ という命題の真偽になる。$a=(\imath x)(\phi x)$ は，$a=a$ ではないとすれば，$(\imath x)(\phi x)$ が固有名であるかぎり $a=(\imath x)(\phi x)$ はかならず偽である。すなわち「$a=(\imath x)(\phi x)$ は，この結果として $(\imath x)(\phi x)$ が y の値ではないということになるような命題函数 $a=y$ の値ではない。しかし，y はなにかではありうるから，$(\imath x)(\phi x)$ がなにものでもないという結果になることはある[38]。

「源氏物語の著者」がある対象 c を表わしているとすれば，"$E!(\imath x)(\phi x)$" は "$(\exists c):\phi x.\equiv_x.x=c$" と等値である。だから，"$E!(\imath x)(\phi x)$" は，$(\imath x)(\phi x)$ に関するなんらかの命題によって肯定されるものの部分であると考えられる。いま命題を $f\{(\imath x)(\phi x)\}$ とすれば，われわれに確言できるのは，$\phi x.\equiv_x.x=c$ のとき fc だということである。つまり，「『ϕx を満足する x は fx を満足する』が意味するはずのものは，『x が c であり，fc が真であるとき，そのときにかぎって ϕx が真であるような対象 c がある』ということである[39]」。このことは，記号で表現すれば，$f\{(\imath x)(\phi x)\}.=:(\exists c):\phi x.\equiv_x.x=c:fc$ と定義され[40]，$(\imath x)(\phi x)$ は完全に消去される。したがって，$(\imath x)(\phi x)$ はたんなる記号であって，ふつう文字が導入される際に仮定されているようなある対象を表わさないと理解しなければならない。言い換えれば，"$(\imath x)(\phi x)$" そのものはなにも意味がなく，命題函数 fy の y に置換されて有意味な命題になる。

ラッセルによれば，$f\{(\iota x)(\phi x)\}$ がほかの命題の部分であるとき，$(\iota x)(\phi x)$ は 二次的に生起 secondary occurrence しており，$(\iota x)(\phi x)$ が二次的に生起しているときは，その命題は $(\iota x)(\phi x)$ の存在しないときでも真である可能性がある。このことは，「日本の大統領のような人物は存在していない。」という命題にもあてはまる。"ϕx" が「x は日本の大統領である」を意味するなら，この命題は，$\sim\{E!(\iota x)(\phi x)\}$ あるいは$\sim\{\exists c.c=(\iota x)(\phi x)\}$ として説明される。どちらも $(\iota x)(\phi x)$ の生起する命題が偽であることを立言している[41]。

ところで，「日本の大統領は鈴木善幸ではない。」という命題は，ラッセルの見解にしたがえば，二様に分析できる。すなわち，

(1) $[(\iota x)(\phi x)]\{\sim\psi(\iota x)(\phi x)\}$

(2) $\sim\{[(\iota x)(\phi x)](\psi(\iota x)(\phi x))\}$

の二通りである。(1)と(2)との違いは，否定が内にあるか外にあるかという点にあり，表わされる内容には，鈴木善幸が日本の大統領でないということか，日本の大統領が鈴木善幸であることはないということかの相違がある。この二つはともに真理値があり，(1)は偽，(2)は真である[42]。

記述句を消去する方法は，やはり二通りあり，リンスキー Leonard Linsky にしたがえばつぎのように述べられる[43]。すなわち，

(3) $[(\iota x)(\phi x)]\{\psi(\iota x)(\phi x)\}$

は，$(\iota x)(\phi x)$ を消去すると，

(4) $(\exists c)[(x)((\phi x)\equiv(x=c))\cdot(\psi c)]$

と表わされるが，記述句を含む命題が

(5) $x\{\psi(\iota x)(\phi x)\}$

という形式であるとすれば，

(6) $x\{(\exists c)[(x)((\phi x)\equiv(x=c))\cdot(\psi c)]\}$

として $(\iota x)(\phi x)$ は消去される。この記述句を含むもとの命題が，ラッセ

ルの用いた例の「ジョージⅣ世は，スコットがウェーヴァリーの著者であるかどうか知りたがった。」という命題であるとすれば，(4)は，ただひとりのひとがウェーヴァリーを書き，ジョージⅣ世はそのひとがスコットであるかどうか知りたがった，という意味であり，(6)は，ジョージⅣ世は，ただひとりのひとがウェーヴァリーを書いたかどうか，そして，そのひとがスコットであるかどうか知りたがった，という意味である。

ところで，プリンキピア・マテマティカによれば，つぎのような命題が定義され，導出されている(44)。

14.02　$E!(\iota x)(\phi x) . = : (\exists b) : \phi x . \equiv_x . x = b \quad Df$

14.1　$. \supset \vdash :: (\iota x)(\phi x) = (\iota x)(\phi x) . \equiv :. (\exists b) : \phi x .$
$\equiv_x . x = b : b = (\iota x)(\phi x) :.$
$\equiv :. (\iota x)(\phi x) = (\iota x)(\phi x) :: \supset \vdash . Prop$

14.15　$\vdash :. (\iota x)(\phi x) = b . \supset : \phi \{(\iota x)(\phi x)\} . \equiv . \phi b$

14.02 は，「ϕx を満足する x が存在する」という命題は，ϕx が x の唯一の値によって満足されるとき，そのときにかぎって成り立つことを定義するものである。14.1は，$(\iota x)(\phi x)$ は，それが“$(\iota x)(\phi x) = (\iota x)(\phi x)$”において一次的に生起しているから，$(\iota x)(\phi x)$ の前に消去されることを示しており，当然，“$(\iota x)(\phi x) = (\iota x)(\phi x)$”なら，$(\iota x)(\phi x)$ がまず消去される。この消去の順序は真理値に違いを生じないはずである。14.15 は，$(\iota x)(\phi x)$ があるものを表わしていれば，$(\iota x)(\phi x)$ を含む命題が $(\iota x)(\phi x)$ の表わしているものの命題に等しいことを論理的に合意している。

すると，さきほどの(4)の意味に立ち還えれば，それは一次的生起の確定的記述に一致し，ジョージⅣ世は，スコットはスコットであるかどうかを知りたがったということがほかの前提から帰結する。「スコットはウェーヴァリーの著者である」は $b = (\iota x)(\phi x)$ と書けるが，これと $\phi(\iota x)(\phi x)$ という前提をとれば，上の 14.15 を得られるはずである。

「ジョージⅣ世は，スコットがウェーヴァリーの著者であるかどうかを知りたがった」を(4)の意味で理解すれば，「ウェーヴァリーの著者」はひとりであり，「プリンキピア・マテマティカの著者」とは内包が異なるけれども，いずれの場合も形式的には(4)の表現が与えられ，対象の存在が措定される。だから(4)の連言の各項は，$(\exists c)\{(x)[(\phi x)\equiv(x=c)]\}$ および $(\exists c)(\phi c)$ と表わされる。これは14.02によって $\exists !(\imath x)(\phi x)$ と同じものであり，「ウェーヴァリーの著者」に即していえば，「ひとりのひとがウェーヴァリーを書いて，そのひとにかぎる」ということを意味する。

この意味と(6)の意味とを考量すれば，ジョージⅣ世は，ウェーヴァリーを書いたのがだれかを知らなくても，ウェーヴァリーがただひとりのひとによって書かれたことは知っているとも思われるので，(6)はジョージⅣ世の望んだことを表わす命題であるとはかぎらないと思われる。また，この点からひるがえって(4)の意味を考察すると，「ウェーヴァリーの著者」の一次的生起がスコットの存在と直接的に連関しないから，やはり(4)もジョージⅣ世の望みを表わす命題ではない。

こうしてみると，問題は，確定的記述の不定性に収斂する。あるいは，「プリンキピア・マテマティカの著者」の場合のような，いわば適格でない欠格の記述[45]に関連する。

IV

ラッセルの確定的記述という概念は，さきに述べたように，不定的記述の理論との関係で理解されるから，確定的記述に関する問題は，やはり不定的記述との関係で解明できるはずである。

不定的記述は，「あるしかじかのもの」という記述句を含み，「あるしかじかはかくかくである」という不定的記述は，“$F\alpha xGx$”と記号化できる。

これは，$(\exists x)(Fx \cdot Gx)$ と等値である。一方，適格の確定的記述は，当該の性質を有する独自の個体を外延するかのように想定されている。不定的記述が $(\exists x)(Fx \cdot Gx)$ とも解釈できるということであれば，その例となるのは，「ただ一つのものがしかじかであり，しかもそれはかくかくである」と表現されるような命題である。すると，不定的記述を固有名のように解して，不定的記述が固体を外延すると考えてよいと思えるような印象を受ける。しかし，もちろん，不定的記述は，その定義からして，特定の対象的存在に言及しないことは明らかである。だから，不定的記述に確定的な意味を与えるのは，すでに意味の知られているような語句を導入するか，あるいは，すでに知られているような表現を厳密に調整することによるかしなければならない。別の言い方をすれば，一つの表現は，その構成要素の意味によって理解されなければならない。そのために，当の表現に見かけでは現われていないものも表現する必要がある。そのような表現が得られれば，これは論理的に完全な言語であるはずであり，そこでは不定的記述は徹底的に排除されていなければならない。だから，$(\exists x)(Fx \cdot Gx)$ の例となるような命題は，日常的な言語の文法を表わす補助的手段であり，論理的に完全な言語に至る過渡的段階に現われるものである。

常識的には，「われわれの文法的直観の再構成と存在論的直観の再構成とがひとしく同性質であることが分かるかぎり，存在論的構成を文法的構成と一つのものだとすることになにも害はない[46]。」しかし，ある表現もしくは命題の論理的性質や論理的関係は，その論理形式に依存し，論理形式はかならずしも文法形式と一致しない。文法形式は，文法的範疇の構成要素を複合する形成規則によって構成される。だから，この構成がある表現に文法形式を割り当てるといえる。したがって，「ある表現が文法的に正しいのは，その表現が文法的に単純な構成要素から形成規則に則って『構成される』ときである[47]。」これに対して，ある表現の意味論的価値がその

表現の論理的に単純な構成要素によって構成されるのであれば，ある命題の論理形式は，文法的説明を文法形式の形成規則による説明と同じように行なえる。すなわち，タルスキーの証明したように，論理的帰結と妥当性の概念とは，構成によって与えられるのである[48]。ただし，ある命題の見かけの文法形式をそのままにして，論理形式を変えることはできる。単純な例でいえば，「吉田茂は第二次世界大戦後日本の首相であった」という命題の固有名を不定的記述に置き換えれば，見かけは同じ文法形式をもっていても，意味論的価値は異なるものが得られる。

文法が実体的存在を要求する場合，論理的に完全な言語を得るには，フレーゲのように存在論的な考案によって日常言語の元のままの状態を保存することもできるけれども[49]，すくなくとも確定的記述に関して，ラッセルはそれを文法的再構成と置換とによって行なおうとした。フレーゲによれば，見かけの文法的形式を受け入れ，集合概念を用いることになる。この方法は，フレーゲ自身の数の取り扱いや，カルナップによる命題の模型の集合への還元[50]に機作しているのが見うけられる。ラッセルの方法によれば，「二つの花がある」という命題は，「一つの花があり，もう一つあり，ほかにはない」という翻訳が行なわれよう。この翻訳自体は表面上なにも問題はないように思われるが，そのような言語的置換は，確定的記述の対象の存在の不確定性を内包している。ラッセルの認識論的格率は，オッカムの剃刀であり，それはつぎのように述べられる原理である。「可能なときはいつでも，推論された実体に論理的構成体を置換するべきである[51]。」この原理を用いて，たとえば，基数は所与の集合の基数と考えられ，フレーゲに則って，ラッセルの基数に与えた定義は，$NC=\hat{\mu}\{(\exists\alpha)\cdot\mu=Nc`\alpha\}$[52]であり，この場合 NC は基数の集合を表わすから，基数とは所与の集合に相似なすべての集合の集合ということになり，「基数」にあたる実体の集合を推論する必要がなくなる。このように，数学的実体概念については，

ラッセルもフレーゲの方法に依っているにもかかわらず，ラッセルはフレーゲの存在論的構成の意味を理解し損ねたように思われる。というのは，オッカムの剃刀を実体概念の数を極小にするのに有効な原理とするあまり，みずからの言語的置換の方法と存在論的構成の方法との区別が，ラッセルにとってはそれほど明確ではなかったからである。

確定的記述の例として，いま「日本の現首相」と「アメリカの現首相」とを採れば，「日本の現首相は存在する」という命題を聞かされてもすこしも異和感がないのに反して，「アメリカの現首相は存在しない」という命題の説明を求められるとある困難を感じる。つまり，「アメリカの現首相」は，アメリカ合衆国の制度上存在していないにもかかわらず，この命題の主辞は「アメリカの現首相」であると仮定されているから，非存在の存在に言及する困難を感じるのである。このような確定的記述の言語的置換は，不可能ではないにしても無意味であろう。したがって，「記述」の定義が見かけ上単純明解であっても，しかも欠格の「記述」でなくても，確定的記述がある命題に現われるとき，その記述の外延する存在がないような場合があると考えなければならない。これは，さらに，言語的置換を徹底すれば，確定的記述は消滅することを意味するから，記述の理論が文脈的観点から日常言語を救おうとするかぎり，記述の定義に見られる存在仮定と矛盾し，フレーゲに則って存在的観点を救おうとすれば，記述の理論が目指した論理的完全性は達成されないはずである。

記述の理論は，日常言語の文法の論理的欠陥ともいうべき，存在の構造に関する誤りを正そうとする分析方法であり，文脈的定義によって，存在の特性を記述するのに必要でないような概念を消去するものであるから，論理的に完全な言語においては，記述句は現われず，限量詞とか，変項とか，論理定項とかによる表現だけが残ると思われる(63)。そうだとすれば，記述は存在とは無縁だとも言える。記述の外延が存在しないような場合に

ついての想定は，記述句とそのラッセル流の分析とに関する矛盾に関係するものではないとする解釈も可能であろうし(54)，また，ストローソン Strawson のように，記述句の言及する対象の存在は前提されており，対象が存在していなければ，記述句を含む命題は，真理値を欠いた表現を行なうために用いられているのだと見做すこともできよう(55)。記述の理論の重要な帰結は，存在が命題函数の属性として扱われるということであり，存在する対象は，満足される命題函数に依存すると理解できるから(56)，クワイン Quine のように，「存在することは変項の値であることだ(57)」と把握するにいたりもするのであろう。このようなさまざまな理解は，真偽をめぐる論証につながる問題を考察してから検討するべき課題である。

注

(1) cf., Bertrand Russell, On Denoting, Mind Vol. 14, 1905. Reprinted in Russell's Logic and Knowledge, ed. by R. C. Marsh, pp. 41-56, George Allen & Unwin, London, 1956.

(2) Bertrand Russell, Introduction to Mnathematical Philosophy, p. 174, George Allen & Unwin, London, 1953. 以後 I. T. M. P. と記す。

(3) David Kaplan, What is Russell's Theory of Descripion, in Bertrand Russell–A Collection of Critical Essay–, ed. by L. T. Pears, p. 227, Doubleday, New York, 1972. 以後 W. R. T. D. と記す。

(4) この小論の第Ⅱ節は拙稿「バートランド・ラッセルの構成主義理論における還元関係について」〔大阪電気通信大学研究論集（人文，社会科学）第6号所収〕の文言を部分的に修正しつつ用いて論究した。

(5) a propositional function. cf., Bertrand Russell, The Principle of Mathematics, 2nd ed. pp. 82-88, George Allen & Unwin, London, 1937.

(6) I. T. M. P., p. 168.

(7) ibid.

(8) ibid.

(9) op. cit., p. 169.

(10) ibid.

(11) ibid.

(12) ibid.

(13) op. cit., p. 170.

(14) cf. ibid.

(15) x is unreal.

(16) 非実在の論議に，非実在のあるものという記述は循環的であるが，この場合は議論の一般化のために用いてある。

(17) I. T. M. P., p. 170.

(18) ibid.

(19) cf., op. cit., p. 171.

(20) ibid.

(21) ibid.

(22) op. cit., p. 172.

(23) ibid.

(24) biid.

(25) op. cit., p. 178.

(26) ibid.

(27) op. cit., p. 177.

(28) cf., ibid.

(29) op. cit., pp. 177-178.

(30) op. cit., p. 178.

(31) cf. ibid.

(32) Arnold N. Whitehead & Bertrand Russell, Principia Mathematica, vol. I, 2nd ed. p. 173, Cambridge University Press, Cambridge, 1925. 以後 P. M. と記す。

(33) ibid.

(34) ibid.

(35) cf., ibid.

(36) cf., op. cit., p. 66.

(37) cf., ibid.

(38) op. cit., p. 67.

(39) op. cit., p. 68.

(40) ibid.

(41) cf., op. cit., pp. 68-69.

(42) cf, Leonard Linsky, Reference and Referents, in Essays on Bertrand Russell, ed. by E. L. Klemke, p. 227, University of Illinoi Press, Chicago, 1970.

(43) cf., op. cit., pp. 227-228.

(44) cf., P.M. pp. 173-179.

(45) W. R. T. D., p. 227.

(46) op. cit., p. 241.

(47) op. cit., p. 235.

(48) cf., A. Tarski, Der Wahrheitsbegriff in den formalisierten Sprachen, Studia Philosophica, Vol. 1, 1936 ; and Über den Begriff der logischen Folgerung, Actes du Congrês International de philosophie Scientifique, Vol. 7, 1936. Translated as The Concept of Truth in Formalized Languages and On the Concept of Logical Consquence in Tarski's Logic, Semantics, Mathematics, Oxford, 1956.

(49) cf., G. Frege, Grundlagen der Arithmetik, Breslaw, 1884.

(50) cf. R. Carnap, Meaning and necessity, pp. 177-182, The Uiversity of Chicago Press, Chicago, 1947.

(51) Bertrand Russell, Mysticism and Logic, p. 155, George Allen & Unwin, London, 1917.

(52) Arnold N. Whitehead & Bertrand Russell, Principia Mathematica, Vol. II, 2nd ed., p. 5, Cambridge, London, 1927.

(53) cf., R. J. Clack, Bertrand Russell's Philosophy of Language, p. 53, Martinus Nijhoff, Hague, 1969.

(54) cf., R. M. Sainshury, Russell, pp. 116-122, Routledge & Kegan Paul, London, 1979.

(55) cf., Max Black, Russll's Philosphy of Language, in The Philosophy of Bertrand Russll, ed. by P. A. Schilpp, pp. 227-255, Tudor Publishing Company, New York, 1944.

(56) cf., A. J. Ayer, Russell, pp. 59-60, The Woburn Press, London, 1974.

(57) W. V. O. Quine, From a Logical Point of View, p. 15, 2nd ed. Harvard University Press, Massachusetts, 1964.